

山火事からの復活を目指したボランティア植樹

～感謝の気持ちは「お接待」で～

本島漁業協同組合女性部
松 成 幸 子

1. 地域の概要

私たちの住んでいる本島は、丸亀港から北へ 11km、備讃瀬戸中央部の塩飽諸島の中に位置し、島の面積は 675ha、人口は 730 人で、漁家数は 143 戸である。

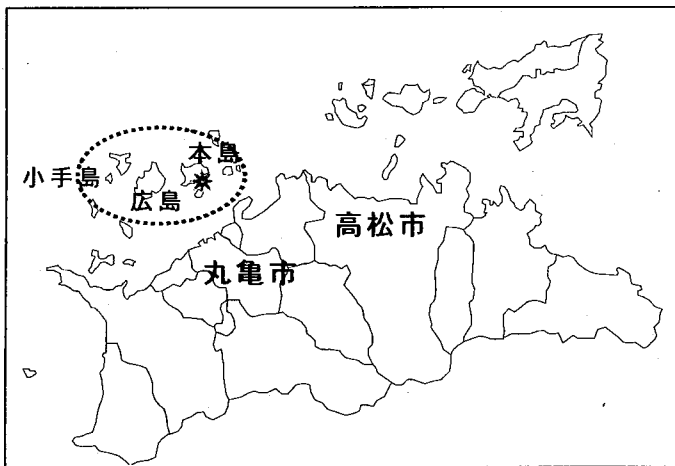


図 1 地域図



写真 1 本島漁業協同組合

2. 漁業の概要

本島漁協は昭和 24 年 9 月に設立され、平成 13 年に近隣の広島、小手島漁協と合併して、現在は正組合員 136 名、女性 51 名を含む准組合員 67 名の計 203 名で構成している。主な漁業は潜水器と刺し網、底曳網などの漁船漁業や、ヒラメ、トラフグなどの養殖業である。平成 2 年から漁協事業として、丸亀港のすぐ近くに「本島活魚センター」を開設し、平成 16 年から弁当や惣菜の製造と販売も行っている。

3. 研究グループの組織と運営

女性部は昭和 37 年 11 月に結成され、部員は現在 97 名、うち役員は 18 名で、部員には知事認定の指導漁業士が 2 名いる。

結成当初から、天然せっけんの使用や海浜清掃などの環境保全活動に取組み、平成に入ってからは、ワカメの茎の佃煮やままかり(サッパ)のあめ煮など低利用水産物の加工品作りにも取組み、毎年 10 月に開催されるふれあいまつりや、3 月開催のマラソンイベントなどではたこの天ぷらなどを販売し、大変喜ばれている。また、年 1 回は必ず県外の先進地に視察に行き、加工品のヒントを得たり部員相互の親睦を図るなど意義あるものになっている。さらに、小手島特産のイカナゴを使って「くぎ煮」の作り方を教わるなど、合併漁協の女性部員との交流も深めている。

一方で、部員の高齢化に伴って、女性部として「家庭」だけではない「地域」を考

えた福祉活動などにも取組み、従来からの目標である「ここに住んでよかったという島づくり」を目指している。

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

平成 14 年 8 月 20 日昼頃、本島の西側で原因不明の山火事が発生した。懸命の消火活動の結果、9 月 3 日にようやく鎮火が宣言されたが、15 日間で島の約 1/4 にあたる 160ha を焼失した。

この山火事は、島の住民をはじめ丸亀市や県内外の延べ 3,500 人余による消火活動と消防車両延べ 671 台、ヘリコプター 79 機が出動したほどの大規模なものであった。

この間私たちは、消火活動にあたってくださる方々に、感謝しながらもお茶の提供くらいしかできず、「もっとなにかしなくては！」と強い焦りを感じていた。そして、山火事が鎮火した後、日が経つにつれ、痛々しい島の姿を見るたびに、「島の緑を取り戻すためになにかできないか」という思いを強くしていった。

5. 研究・実践活動状況及び成果（効果）

1) ボランティア植樹

平成 15 年 2 月 22 日、丸亀市主催で 1 回目のボランティア植樹が行われることになった。市の広報紙などによる比較的短期間の参加呼びかけにもかかわらず、当日は島内外から約 500 名が参加し、面積にして 1ha、4,950 本のヤマモモ、クロマツやアカマツなどが植樹された。このときは、自治会からの割当てで部員 3 名のみが参加した。

2 回目の植樹は平成 15 年 11 月 29 日、「第 48 回香川県植樹祭」が本島で開催された時であった。県の植樹祭は、例年は式典がメインだったが、この年から県民参加型のボランティア植樹方式に変更されたものである。

私たちは、参加者募集の新聞記事を見てすぐに全員一致で率先して参加することを決めた。女性部員 13 名と、別に小中学生の子供を持つ部員は、私もだが保護者として、合計 19 名が参加した。

山火事発生までは植樹経験のある部員はおらず、事前に送付された資料で勉強し、さらに現地で県や市の担当の方々に教わりながら、一人 10 本前後の苗木を丁寧に植え終えた。前日からの雨で足元がぬかるみ、作業には特に慎重さが必要で、着込まないと手もかじかむほどの寒さだったが、作業を終える頃には心も体も温かくなっていた。

当日の参加者は約 450 名であったが、私も子供と一緒にヤマモモやヤマツツジなどを植え、その時の写真(写真 2)が市の広報紙に載せられた。

平成 16 年 11 月 21 日には、1 回目と同様に丸亀市の主催で、募集枠いっぱいの約 500 名が参加して、3 回目のボランティア植樹が行われた。部員も 14 名が参加して、面積にして 0.9ha、4,075 本のヤマモモなどを植樹した。

そして平成 17 年 11 月 20 日、同様に 4 回目のボランティア植樹が行われた(写真 3)。よい天候にも恵まれて約 500 名が参加し、うち女性部員は 19 名が参加した。それまでは植樹後の「お接待」の準備のため、部員は早めに作業を切り上げなければならなかったが、植樹にも慣れてきて役割分担しながら作業し、私たちに割当てられた全ての苗木を効率よく植え終えることができた。

4回の植樹がすべて冬に行われた理由が、秋から冬にかけて木が「根付き」やすいことや、植樹後に少し雨が降るとより良いことなど、それまで知らなかったことを勉強しながら、島の緑を取り戻すために、寒いなかでも頑張ることができた。



写真 2

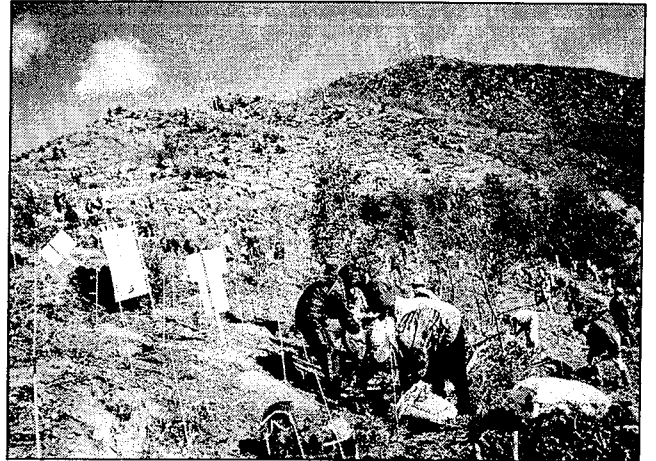


写真 3

2) お接待

平成 15 年 11 月の県植樹祭では、私たちは植樹への参加だけでなく、わざわざ島に来て木を植えてくださる参加者のために、「感謝の気持ちを伝えたい」との思いで、「お接待」をすることにした。

「お接待」とは、四国八十八ヶ所巡りにちなんだ古くからの文化で、お遍路さんに対して地元の人がお茶や食べ物、宿の提供を行ったりする日常的な支援のことである。

当初の話合いでは、植樹後は疲れているので、「みかんなどの果物かうどんなどあったかいものがないのでは」との意見があった。しかし、「なによりおなかがすくだろう」とか、「うどんは他のところから提供するらしい」ということで、帰りのフェリーの中でも簡単に食べられるパンとジュースに決め、参加者全員に配布した。

平成 16 年の 3 回目と 17 年の 4 回目のボランティア植樹の日も、私たちは参加者全員にパンとジュースのお接待を行った(写真 4、5)。参加者から、特に年配の方からは「ボランティアで来ているのに、ありがたい」とか、パンとジュースを何種類かずつ用意していたので、子供たちからは「どれにしよう、迷うなあ」という声が聞こえるなど、「ホッ」とする瞬間を提供できたようで、私たち女性部員も大変うれしく満足している。また、高校生や大学生と「どこから来たの?」とか「島は初めて?」など交流を持つことも、私たちの楽しみの一つになっている。

これらの費用は、ふれあいまつりでのタコの天ぷらなど加工品の販売や、女性部の通常の活動費から支出したが、活動費を使うことに部員から不満が出ることもなく、むしろ「お接待をする」という目的ができて販売にも力が入り、それまで以上の売上をあげることもできている。特に平成 17 年は、ふれあいまつりで初めて「タコ飯」を作り、大変好評だったため、女性部の新たな販売メニューに追加できたし、ボランティア植樹の際には、「高齢で山には登れないけれど参加したい」と、植樹参加者とは別に 7 名の部員がパンとジュースの袋詰め作業に加わるなど、新たな成果も得られている。また、配布用のパンとジュースは、3 回とも組合が所有する船を出して島まで運んでくれるなど、多くの人々の協力も得られている。



写真 4



写真 5

6. 波及効果

1) 女性部活動の活性化と連帯感の強化

山火事の際には、私たちは数多くの方々から支援と励ましを受けて、心から感謝している。そして「私たちもなにかしなくては！」という強い思いから、ボランティア植樹の話聞いた時には全員一致で参加とお接待をすることを決め、配布するパンやジュースの資金を捻出するため、イベントなどでの加工品の販売にも特に力が入るなど、「植樹」を軸に女性部活動も活発となり、部員の連帯感もより一層強くなっている。

2) 環境保全意識の高まり

私たちも知識としては、「豊かな海の恵みは、森に降る雨が川を通り、植物プランクトンを育むことによって作られている」ということは知っていた。そして今、従来の環境保全活動の他に、山火事という悲しい出来事があったことをきっかけとして、私たちは「植樹」という新たな取り組みに広げていくことができている。

私たち部員にできることは微力だが、植樹活動を通じて、「ここに住んでよかったという島づくり」から、『海を守るために島の森を守ろう』というところまで、島の住民一人一人の意識を高めていくことができれば、これ以上のことはないと思っている。

7. 今後の活動計画

1) ボランティア植樹への参加、お接待

本島は瀬戸内海国立公園の中に位置することから、市主催のボランティア植樹とは別に、国（環境省）や県による植樹事業が進められており、私たちも大変感謝している。これからも私たちはボランティア植樹に積極的に参加し、お接待も続けていく予定である。また、本島のみならず小手島や広島部の部員にもさらなる参加を呼びかけるとともに、県内の他の女性部にも、私たちの活動への協力をお願いしていきたい。

2) 従来活動の継続

養殖ワカメの加工品やイカナゴのくぎ煮以外にも、私たち若い部員が中心となって、新たな加工品作りに積極的に取り組んでいきたい。そして、諸先輩方が今まで大切に行ってきた天然せっけんの使用推進や海浜清掃、島のイベントなどへの参加はこれからも継続し、そしてその活動を守り、さらに福祉活動など「ここに住んでよかったという島づくり」の実現を目指して、これからも精一杯頑張っていきたい。